

第4章 インドクジャク生息調査

4.1 はじめに

平成 27～31 年度の外来種対策事業（クジャク対策）および令和 2 年度の外来種対策事業（鳥類対策）において、黒島におけるクジャクの生息調査が実施されてきた（沖縄県、2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021）。クジャク対策の成果を評価するための指標として、令和 3 年度事業においても生息調査を実施した。

4.2 方法

(1) 調査期間および方法

調査は令和 3 年 2 月 28 日～3 月 2 日に実施した。本調査は車および徒歩による目視調査とし、クジャクの活動が活発になる朝および夕方を中心に行った。また、車や徒歩による目視が困難な地域については、前年度と同様に無人小型航空機（以下、「ドローン」という。）を使用し（図 4.1）、上空から個体数をカウントした。なお、ドローンはクジャクが映像で確認できる高度約 20m を平均時速 13.0km で運行させ、カメラ角度は 45 度を保って撮影した。なお、先述のサーマルドローン調査結果を適宜使用し、当該調査結果を補完した。



図 4.1 ドローン（左：DJI Phantom 4 Pro）および調査状況（右）

(2) 調査ルート

調査ルートは過年度と同様のルートとし、目視により 31km、ドローンにより 20km の調査を行った (図 4.2)。

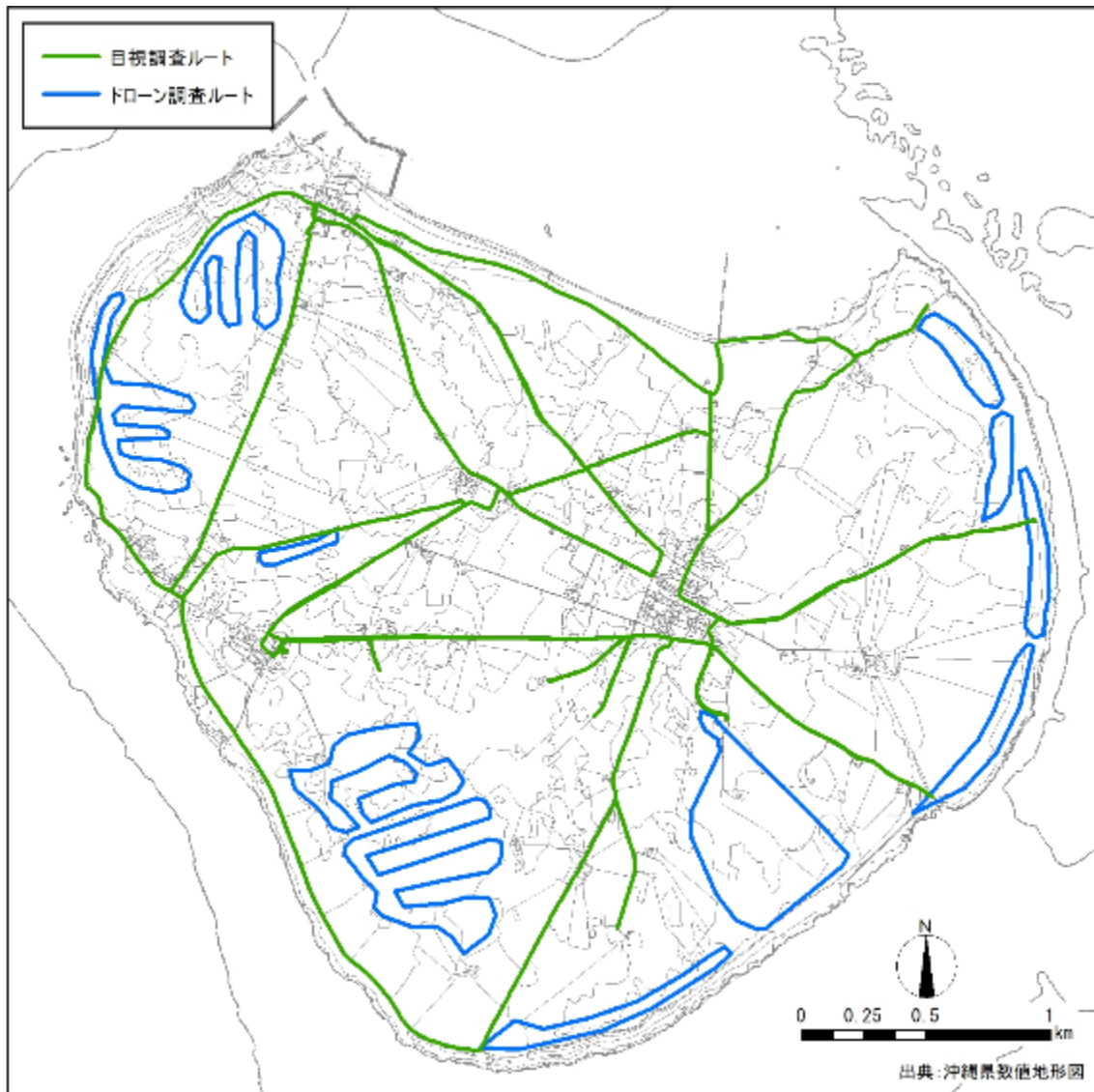


図 4.2 生息調査ルート

4.3 調査結果

(1) 目視による調査結果

黒島においては21地点で合計92羽（オス42羽、メス49羽）の生息を確認した（図4.3）。確認数は昨年度の93羽（17地点）と比較すると同程度であった。また、本調査では31.0kmの調査を行い、平均目視幅は200mとすると、センサス実施面積は6.20km²となる。黒島の面積は10.02km²であることから、センサス実施率は島の約62%であり、生息確認数を0.62で除すると、黒島の推定生息数は148羽と算出された。同様の解析を過年度についても行うと、平成27・28・29・30・31年度・令和2年度の推定生息数はそれぞれ369・325・192・122・113・150羽であると推測されることから、生息数は平成31年度までは減少傾向にあったが令和2年度は増加し、令和3年度は同程度となった（図4.4）。なお、オスのディスプレイはねぐら踏査時の2月17日に確認されており、例年通りに繁殖活動が開始されているものと推測された（沖縄県、2021）。

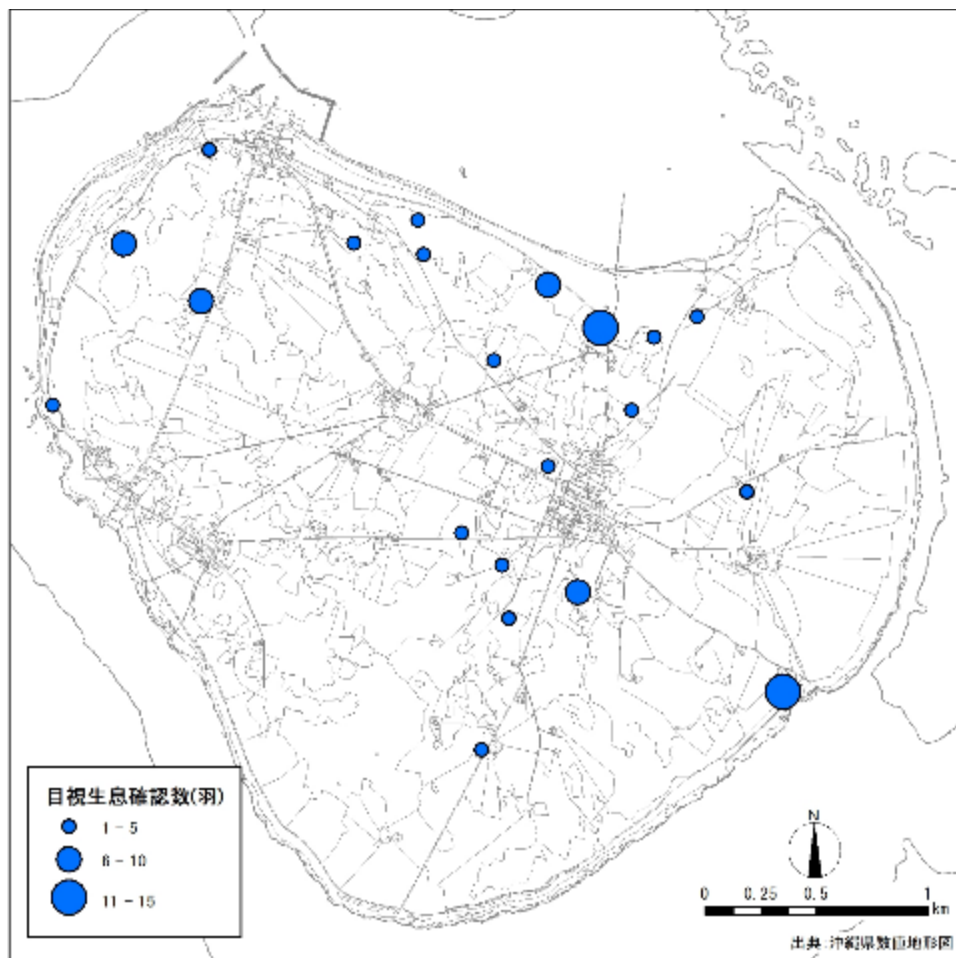


図 4.3 目視生息確認位置（令和3年度）

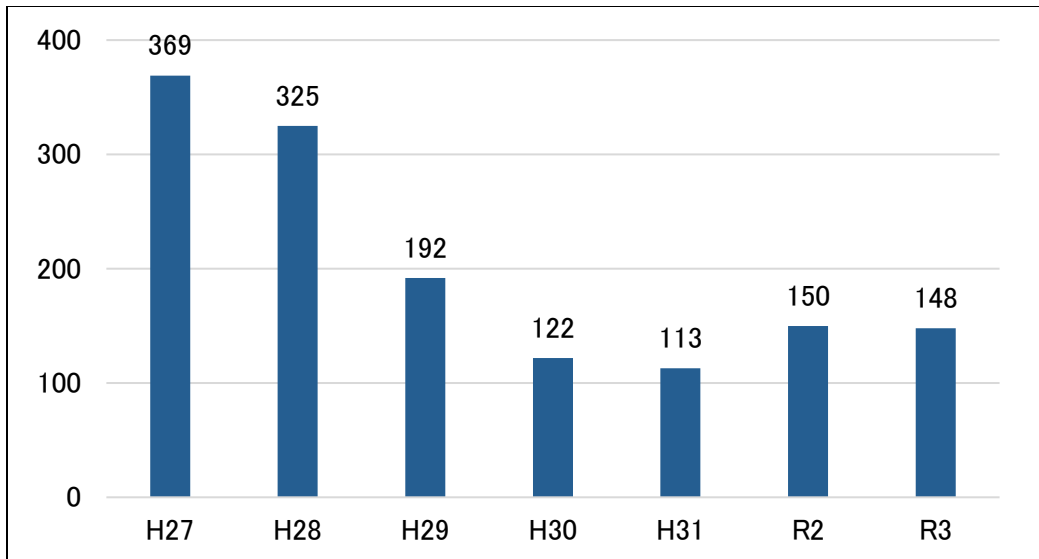


図 4.4 目視調査結果を用いたクジャク推定生息数の推移

(2) 目視およびドローンによる調査結果

ドローン（サーマルドローン調査結果を含む）による調査では、6 地点で 54 羽を確認した（図 4.5）。本調査結果と目視調査結果（92 羽）を統合すると 146 羽となり、目視調査により 31.0km、ドローン調査で 20.0km の合計 51.0km の調査を行い、平均目視幅をどちらも 200m とすると、センサス実施面積は 10.22km² となる。黒島の面積は 10.02km² であることから、島全域をカバーしているためセンサス実施率は島の 100%であり、生息確認数を 1.0 で除すると、推定生息数は約 146 羽となる。当該数値は、目視調査における推定生息数と比べて同程度であった。

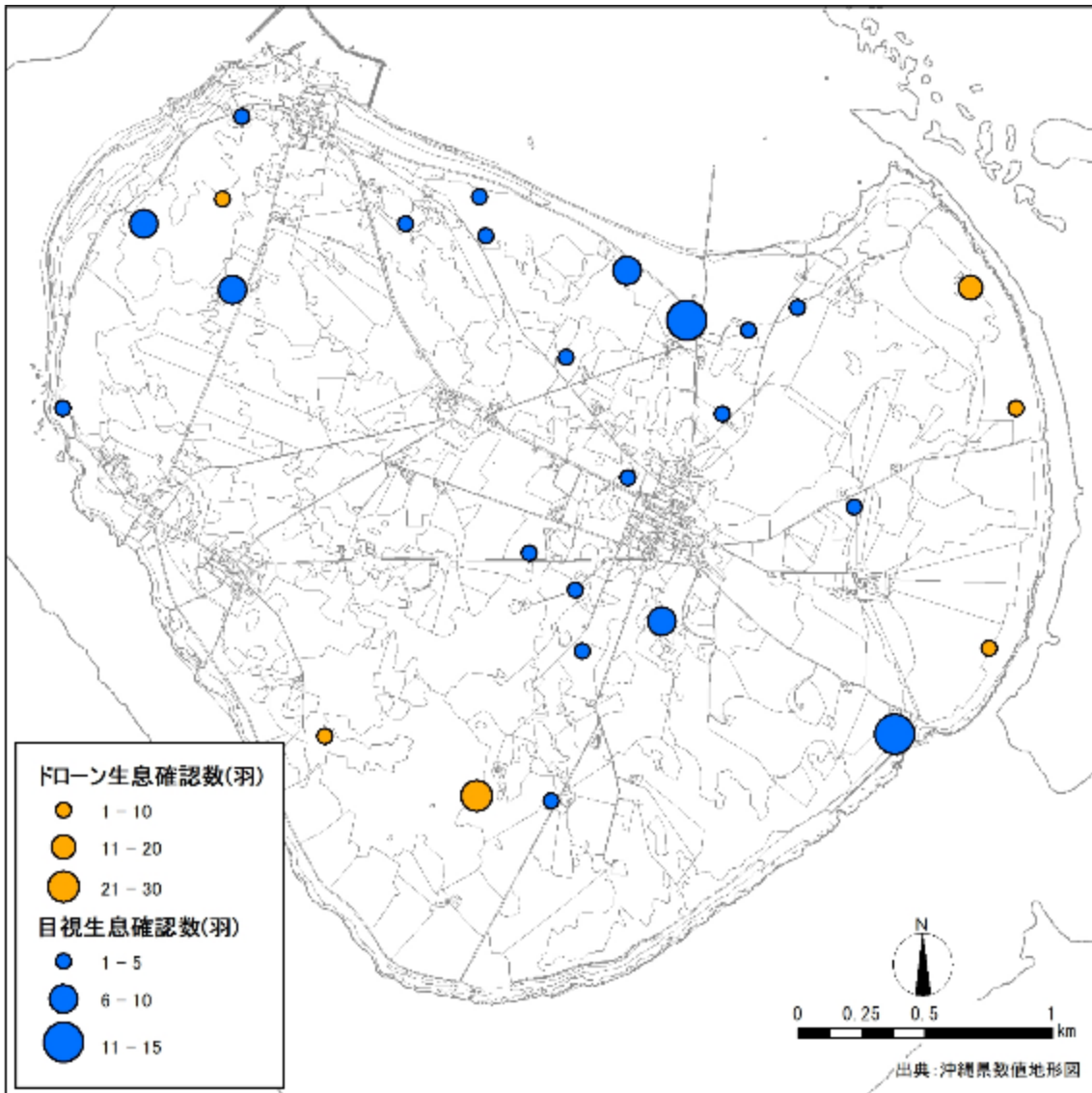


図 4.5 ドローンによる生息確認位置（令和3年度）

4.4 引用文献

- 沖縄県（2016）平成27年度外来種対策事業（クジャク対策）報告書。
 沖縄県（2017）平成28年度外来種対策事業（クジャク対策）報告書。
 沖縄県（2018）平成29年度外来種対策事業（クジャク対策）報告書。
 沖縄県（2019）平成30年度外来種対策事業（クジャク対策）報告書。
 沖縄県（2020）平成31年度外来種対策事業（クジャク対策）報告書。
 沖縄県（2021）令和2年度外来種対策事業（鳥類対策）報告書。